



この銅製折り鶴、技の修得には結構時間がかかる。使用する銅板は9cm×9cm、0.1mm厚。使う工具は板金作業によく使う定規、ケガキ、金槌、ツカミ、タガネ、ペンチ、コンパスの七つ道具。まず、正方形の銅板に定規とケガキで寸法どり。これにタガネを当てプラスチックハンマで、ドン、ドンと折り目をつけていく。折り目をペンチで曲げ、形として仕上

「平和の板金術師」が世界の要人に訴えかける

ものづくりを通して社会貢献しようとして、毎年多くの生徒が参加しており、今年も7名、累計で100人を超えます。各人試行錯誤を繰り返しながら努力を重ねています。その結果、でき上がった作品が晴れ舞台に登場したときの生徒たちの達成感はヒシヒシと伝わってきます。ものづくりから始まった銅製折り鶴が今は平和作りに一役買っています。感無量ですね。

の女性板金業者であった。当時の担当教諭は彼女が巧に銅板を折り、鶴を作成している姿を見て、「これだ！」と確信。生徒にもものづくりの達成感を味わわせたいと、彼女に懇願、レクチャーを受け、3年生の課題研究に導入した。2005年から始まったこの課題研究から生まれる作品に触れる人々の反応に、平和発信の力を感じ、ついに校外でも制作実習や作品販売を始めた。

2009年、これが当時の広島市長の目にとまった。地元の高校生がつくる平和を発信する作品を広島を訪れる人々への記念品として制作したらどうかと提案された。

この17年を振り返り、吉村 敦校長は言われる。

活動実績

- 2009年度(平成21年) 広島市長を表敬される方へ記念品として「銅板折り鶴」を寄贈
- 2010年度(平成22年) [ノベル平和受賞者世界サミット2010広島]の受賞者に対して手渡しで贈呈
- 2013年度(平成25年) ビースデパートで売り上げた一部を「広島市原爆ドーム保存事業基金」に寄付(以降継続中)
- 2015年度(平成27年) 原爆投下から70年目の広島で、銅板千羽鶴を作成し、原爆の子の像に献納(現在、広島市中央図書館に展示)
- 2016年度(平成28年) 国連軍縮フェローズに参加した27か国外交官へ贈呈
- 2017年度(平成29年) 「グローバルスクール in Hiroshima 2017」に参加した4か国6地域の高校生に贈呈
- ICANのベアトリス・フィン事務局長へ記念品として贈呈
- 2019年度(平成31年) カトリック広島司教区の屋根材を使用して「銅板折り鶴」を製作し、広島を訪れたローマ教皇へ記念品として贈呈
- 2020年度(令和2年) 国際平和のための対話イベント「NU75 in HIROSHIMA」に参加された国連事務次長の記念品として贈呈



げていく。この製作法は、切削工程がなく、主に曲げる、叩く、伸ばすといった工程がほとんど。だが工具が多彩でコツをつかむにはかなり時間がかかる。

この課題研究は、今の3年生が取り組みはじめて3か月ほど。そろそろ手順にも慣れ、作業もスムーズに進んでいる。「最後にペンチで折り曲げ、立体的に形をつくり出していく所がとくに難しい」とはペンチで折り曲げ作業中の生徒。今では1羽の折り鶴を完成するのに15〜20分くらいでできるようになった。

この取り組みはものづくりから始まり、現在では平和づくりへと大きくはばたこうとしている。この変遷の中で折り鶴を作る姿を見た人たちは、いつしか彼らを「平和の板金術師」と呼ぶようになった。「平和の板金術師」たちは、これまで市などを通じて銅製折り鶴をローマ教皇フランシスコやグテーレス国連事務総長、ノーベル平和賞を受賞したダライラマ14世など多くの海外要人たちに贈呈してきた。

また、最近では同校生徒にとどまらず、幅広いフィールドの人たちに参加してもらおうと校内外の各種イベントで生徒たちが指南役となつて一般の人たちに折り鶴づくりを指導している。

この4月から課題研究を担当されている中村真知機械課主任はこう結ばれた。

「生徒たちの将来を見つめる目は、さまざま。機械系の仕事に就きたい子、自動車系がいいという子、パティシエになりたいという子もいます。この子たちの夢をどんどん広げてやれば良いなと思っています。でも今の今は、増えつづける銅製折り鶴へのニーズに応えるためにみんな一生懸命。夏休みを前に生徒たちの目の色も変わってきています。目標に向かってまっしぐらです」。



平和への思いを込めて  
銅製折り鶴

第50回 日本銅センター賞受賞

広島市立  
広島工業高等学校



銅センター賞の賞碑と賞状をかかげる7名の生徒たち

「ものづくり」を通して  
社会貢献にまい進

「折り鶴」は、起源は定かではないが、数ある日本の折り紙の中で最も古典的なものと言われている。その翼は魂を楽園まで運ぶと信じられてきた。その折り鶴をつなぎ合わせたのが千羽鶴であり、千羽鶴を折ると願い事が叶うと言われている。これを全国的にしらしめたのが、広島市の被爆少女が原爆症回復への願いを込めて折り上げた千羽鶴である。

彼女の折った千羽鶴を超す折り鶴は、父の手で多くの人に配られ平和への思いを伝えた。この逸話は日本国内よりも海外で広く知られており、その折り鶴は世界中の人に平和の象徴として折られてきている。

この折り鶴づくりを教課に取り込み、平和発信のツールにさえしている学校がある。広島市立広島工業高等学校である。その折り鶴が何と銅製なのである。

広島市立広島工業高等学校は、大正13年(1924年)開校。現在機械科、自動車科、電気科、情報電子科、建築科、環境設備科の6科を擁し、来年初より100周年を迎える。

銅製折り鶴との出会いは、技能フェアでのひとり



吉村 敦 校長



中村 真知 機械科主任